

令和 8 年 2026年						
日	月	火	水	木	金	土
1 赤口 う	2 先勝 たつ	3 友引 ●文化の日 明治祭 み	4 先負 一粒万倍日 三りんぼう うま	5 仏滅 ひつじ	6 大安 さる	7 赤口 立冬 一粒万倍日 一の酉 とり
8 先勝 ふいご祭 一粒万倍日 いぬ	9 仏滅 三りんぼう ゐ	10 大安 ね	11 赤口 うし	12 先勝 とら	13 友引 三りんぼう う	14 先負 たつ
15 仏滅 七五三 み	16 大安 うま	17 赤口 ひつじ	18 先勝 さる	19 友引 一粒万倍日 二の酉 とり	20 先負 一粒万倍日 いぬ	21 仏滅 三りんぼう ゐ
22 大安 小雪 ね	23 赤口 ●勤労感謝の日 新嘗祭 うし	24 先勝 とら	25 友引 う	26 先負 たつ	27 仏滅 み	28 大安 うま
29 赤口 ひつじ	30 先勝 さる					

霜月

〔しもつき〕 令和8年 11月

秋も過ぎ去り、冷え込みもきびしくなって、霜が降りという意味があります。

発行：北海道神社庁一區教化委員会

天地の中にみちたる草木まで
神のすがたとみつっ恐れよ

ト部兼邦・兼邦百首歌抄

今月のことば

天地の中にみちたる草木まで

神のすがたとみつっ恐れよ

ト部兼邦・兼邦百首歌抄

天地のうちに自然に育成してゐる草木に至るまで、すべては産霊の神のお働きにより、そこに生命を受けて存在し得てゐるのである。

素直にいへば、天地の自然物は産霊の神の表現である、産霊の神がそこに現れてゐると見られる。自然の妙巧、それ自体が、神の姿そのものと見てよい。

そのものを神とみるときに、自然物たる草木さへ奇しくも尊いものと見られるべきであらう。又自然の姿そのものが人間の姿、心に対し、何らかの教訓を垂れてゐるときへ見られる。人間は自然から教へられることが多い。

そこに自然に対する敬愛を慎みがある。自然に対する慎み、それが教訓としては、恐しこみの心を与へることになる。自然と人生との触れ合ひ、そこに親しみと畏敬がある。

（神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

新嘗祭
十一月八日
火を扱う人々の祭り
「ふいご祭り」

鍛冶職、鋳物師などを始め、火を用いる職業の人々が行う祭り、たたら祭り、金山講ともよんでいます。ふいご祭りの名は、火を起こす道具の轆から出たもので、この日は仕事を休んで注連縄を張り、赤飯や餅を供えて金山毘古神・金山毘売神等を祀ります。江戸年中行事の記録には「十一月八日のいなりふいご祭りに、鍛冶屋でみかんを投げる」とあり、稲荷神社の火焚祭の行事と結びついて受け継がれています。

新嘗
十一月二十三日
新穀を供えて
収穫に感謝「新嘗祭」

新穀を神々に供え神恩に感謝する祭りで、宮中では天皇陛下が新穀を天神地祇に献つて、御自らも召上りになります。

古くは日が定まっておらず、十一月の第二の卯の日を撰んで祭が行われましたが、明治六年の新暦採用の年の第二の卯の日がちょうど十一月二十三日だったことから、以後は十一月二十三日に行われることになったようです。

二十四節気

【立冬 りつりつ】… 七日

旧暦十月亥の月の正節で、これから冬に入る初めの節で、このころは陽の光も一段と弱く、日脚も目立って短くなり、冬の気配がうかがえるようになります。

【小雪 しゅうせつ】… 二十二日

旧暦十月亥の月の中気で、まだ市街には本格的な降雪はないものの、遠い山嶺の頂には白銀の雪が眺められ、冬の到来を目前に感じさせられます。

六曜・選日

《六曜》
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】…万事凶、患は長びくおそれあり
【大安】…何事をするにも吉の日、大吉日
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉
《選日の吉凶》
【三隣亡】…三隣亡日、普請始め、棟上大凶日
【出資・投資・購入・新規事業開始】…婚姻は吉、借りる、離別は凶

七十二候《11月》

小雪
初候・虹蔵不見（にじかくれてみえず）
陽の光も弱まり、虹を見かけなくなる
次候・朔風弘葉（きたかぜこのはをひろく）
冷たい北風が、木々の枯れ葉を落とす
末候・橘始黄（たちばなはじめてきばむ）
橘の実が黄色く色づくる
立冬
初候・山茶始開（つばきはじめてひらく）
さざんかが咲き始める
次候・地始凍（ちはじめてこおる）
大地が凍り始める
末候・金盞香（きんせんかきく）
水仙の花が咲き始める

安産祈願 11月の戌の日
8日（日）
20日（金）
*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。
《3日 文化の日》
自由と平和を愛し、文化をすすめる日です。
《23日 勤労感謝の日》
勤労をたっとうび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう日です。
祝祭日には国旗を掲げましょう

「ハレ」と「ケ」
ふだんの日と特別な日を使い分ける
昔から日本人は、ふだんどおり日常生活を送る日を、「ケ（憂）の日と呼びました。これに対して神社の祭礼や正月や節供、お盆などの年中行事、冠婚祭を行う日を「ハレ（晴れ）」の日として単調になりがちな生活に変化とケジメをつけていました。
「ハレ」のときは、日常から抜け出して特別な日を過ごします。ハレの日用の着物を着たり、神聖な食べ物である赤飯や餅を食べたり、お酒を飲んで祝ったりして、特別な日であることを示しました。
一方、「ケ」はふだんどおり生活を送る日ですが、「ケ」の生活が順調にいかなくなることを「氣枯れ」、つまり「ケガレ」になるとし、とくに死や病、出産などはケガレと覚えてきました。
日本では神話期からケガレを忌み嫌い、神様に近づくとにふさわしい体になるために裸（みそぎ）をし、お祓（はら）いをしたりしました。そして、このケガレを取り除いた状態が「ハレ」だったのです。今では、「ハレ」「ケ」という考え方は一般的ではなくなくなりましたが、ハレの日に着るという意味では、「晴れ着」や「晴れ姿」「晴れ舞台」などの言葉が残っています。

参考文献
『日本人のしきたり』飯倉晴武（青春出版社）

せいしちによ
生死一如
生きることと死ぬことは、不可分なものであること。
ツワブキ

「酉の市」
熊手が売られるようになった理由
毎年十一月の酉の日、全国各地の大鳥神社・鶯神社等で行われるお祭で、初酉を一つの酉といつて一番重視し、順に二の酉、三の酉といい、三の酉がある年は火事が多いという言い伝えがあります。これはひと月に三回も祭りが立つというところで、日常生活がゆるまないよう、気を引き締める意味合いがあったと思われる。
鶯神社はもともと武運長久の神として、武士の信仰を集めていましたが、江戸時代になって祭礼の市で農機具を並べたところ、「福をかき集める」「金銀をかき集める」縁起物として、とくに熊手が人気品となりました。
さらに、お多福面、入船などの縁起物や、黄金餅という栗餅、ゆでたヤツガシラ（サトイモの一種で、「八人の頭になれる」という縁起物）なども酉の市で売られるようになり、武運長久の神としてより、商売繁盛や開運の神として、広く信仰されるようになっていきました。